



組織とモチベーション

清水俊太郎

現代国際法研究会

- 裁判資料
(請求趣旨)の作成
- 弁論



目次

1. 一人一人の限界とは
2. 熱い思いの作用

一人一人の限界とは

組織の現状

最初は20人くらいのチームで大会をスタートしたはずなのに



また一人消え…



最後まで残るのは6人くらいに…
結局4人くらいが全部やることに…



組織の雰囲気

難しい議論や作業に直面する度に雰囲気が悪くなっていく



交わされる会話

- 「他のサークル、学園祭等があつて時間がないので…」
- 「資格試験が…」
- 「英語が分からないので…」

出来ない理由だけが列挙されて最終的にやめてしまう…

疑問

自分の限界は何で決まるのだろうか

もう少しやりようはあるはずなのに出来ない理由のその先へ進めない、議論がされないのは何故だろう

同じような構造

出来ない理由が列挙されるだけの状態を、個人的に毎週経験している場所が…

⇒バイト先の塾でのやり取り

先生や親の感覚

- 親：受験も近いし毎日勉強するのは当たり前だし簡単
- 先生：一日1時間はさすがに

* 与える課題のイメージ右



生徒の感覚

- やる気がないわけでは決してない
 - 部活や行事、人間関係、親、先生等色々な理由で不可能に感じている
 - “不可能”のその先がない
- * 与えられる課題のイメージ



辛いことへの評価は何で変わるのか

生徒によくされる質問

「先生は東大に入るためにどれくらい勉強したの？」

私の答え

「学校ある日は7時間で、ない日は12時間」

生徒

「そんな辛いことを率先してやるなんて、頭おかしい」

私

「???辛いことならやらないの??? (理解不能)」

私と生徒でなにが違うのか

[相違点](勉強について)

- 受動的か能動的か

受験が社会や親に強制されているものと捉えている

- 自分で決めているか

どんな勉強をしていくか自分で決めず、言われたことしかやらない

⇒辛いことに遭遇するとあきらめるのが早い

やる気

あきらめるのは、やる気とか気合いが足りないからなのか？

- 一過性のもの
- やる気スイッチが入っても多くの場合、坂道で切れてしまう。
- 「今やろうと思ったのに、やる気失せた」





自分の限界と熱い思い

自分が限界を感じた時に、あと1分粘ってみよう、この些細な事にこだわってみようと感じ、実行に移せるのは、熱い思いなのではないか

(やる気を超えるなにか)

熱い思い

- 熱い思い ≠ やる気
やる気はだれしもがある程度持っているもの
 - 熱い思いは辛いことを有意義なものにする
 - その人を支配する一貫した行動原理となる。
- ⇒ いったい熱い思いとは



熱い思いの作用

模擬裁判に惹かれることになった契機

- はじめはなんとなく入ったサークル
- あまりやる気はなかった

⇒二人の友人との出会いで、模擬裁判が大学生活で一番時間を割く活動になった

私とアフリカバカとの出会い

- アフリカが尋常じゃないほど好きな人間
- 模擬裁判をする理由もアフリカとのビジネスで使える
- 模擬裁判で得られた経験を将来アフリカで仕事をする上で常に考えていた。

⇒ 体育会系運動部に所属して一年に1回はどこかへ短期留学していたが、模擬裁判も妥協せず日本代表に3度選出

⇒ 決して出来ない理由を並べて途中で投げ出さなかった

私と模擬裁判バカとの出会い

- 私と日本代表としてスイスに行った男で、とてつもなく熱い思いで、私にも熱い思いを抱かせた

英語ができないと渋る私に

- 自分が何故チャレンジしたいのか
- 自分の今後の人生との関係
- 大会をどのように勝ち進めたいか

など本当にいろいろと熱い思いを語ってくれた

⇒ 困難があってもあきらめないだけでなく、渋る人さえ惹きつける

熱い思いを感じたバカの共通点

• どうしてやるのか／どのように活かすか／どのように進めるかなどの事項が、とても具体的な思いだった。

⇒ やっている事に対する思いが具体的であればあるほど熱い思いになっていくのではないか

⇒ 熱い思いをもった人は周囲を感化できるのでは？
(聞いているうちに何故か興奮する)

二人から発見した“熱い思い”

- 熱い思いは具体的であればあるほど熱い思いになる

⇔ 具体性を欠けばただのやる気がある状態

- 熱い思いは常に成長している

⇔ 昔の思いは今の状況と対応しない具体性の欠く、ただの“やる気”に変化してしまうのではない



熱い思いの作用

[作用前]

情報として、模擬裁判を頑張れば貴重な経験や成長ができる
ということを知っているに留まっていた(知識記憶)
⇒やる気はあるが、ある一定以上の負荷を目にすると萎縮

[作用後]

心の底でやる意義を“感じた”(体験記憶)
⇒その後の行動原理が変化して、困難にあたって、乗り越える方法を粘り強く考えるようになった

熱い思いを授業にあてはめると、、、

- 勉強をする意味は知っている(知識記憶)

[熱い思い]

- 高校の地理の先生
地理マニアで、毎回の授業で情熱をもって楽しそうに授業

[効果]

一番人気のある授業で、普段は文系の授業をバカにしがちな理系の生徒も、有意義な授業と評価

熱い思いのある人がいる組織

[辛いことがただ辛いだけの状況に追い込まれた時]

多くの関わっている人が、やることの意義は“知っている”だけのことが多いのでないか？

＝知識記憶に留まっている・頭で理解

⇒理性的に努力しないといけない(しんどい)

自分のやっていることを、頭で無理やり納得させているため、どうしても受動的



熱い思いのある人がいる組織

しかし今取り組んでいることに熱い思いを持った人が、周りの人に自分の思いを語ることで、周りの人を感化させることができるのではないか？

- ・話を聞いて新たな視座を得るだけでなく、感動する

＝やる意義を“知っている”から、心で“感じる”ようになる

（体験記憶）

⇒衝動的に努力することが出来る（疾走感がある・やりがい）

まとめ

- 熱い思いを持った人がいると、やりがいを感じやすい組織になるのではないか
- 熱い思いは人を感動させ、他人に熱い思いが生じるきっかけにもなるのではないか

ご清聴ありがとうございました